

ことばにならないこと —— 《方丈記》と《コヘレット》の自然

今 泉 晴 行

HOJOUKI et QOHELETH

IMAIZUMI, Haruyuki

はじめに

東日本大震災を眼の当たりにしたお年寄りも、戦災を髣髴すると語る。かつて人間の生活の営みがなされた場処があとかたもなく、かなたには海が空とひとつになるところまで何も残されていない。

家屋があったと思われる土台の跡が残された場所で、若い女性が小さなスコップで地面を掘り返し、いつまでも何か探しつづけていた。その後ろ姿は、その場所から動くことができず、ただひたすらそうするしかないように思わせた。

母親を津波で失い、残された幼児たちは、「ママは星になったんだよ。波になって会いたいな」、時折さびしそうに「ママ、どうしていないの」（註1）と問いかける。

「どうして先に行ってしまったのですか？」

「決して忘れません。安らかに眠って、私たちを見守ってください。」

そういうほかない人もいる。

「過去は変えられない。忘れることもできない。しかし、現実だから受入れるしかない」。そう自分自身に言い聞かせようとする人もいる。現象、事態を受け入れるしかなくとも、どのように考えて受け入れればよいのか、思い悩む人もいることであろう。

原発被害という人災は別にしても、地震、津波という自然現象を、わたしたちはどのように考えればよいのだろうか。

過去に度重なる災害を経験した故人がやはり記す。

「カヽル事ヤアル、タゞ事ニアラズ、サルベキ物ノ論（サトシ）カナドゾ、ウタガヒハベリシ（註2）。」

また今回の大震災のあと、内外の人で《天罰》であると語った人がいたが、「あんなふう語る人間がまだいるのか。」「そもそも神はあのような罰を下さない。とりわけ今回のように罪のない人々を罰することはない。何もかも神のせいにした前近代的な考えだ。神は誰をも愛している。（註3）」天は決

して罰を下すことがない以上、天罰という言葉自体がおかしなことであろう。「シロアムの塔が倒れてなくなったあの十八人はどの人々よりも罪深い者だったと思うのか。決してそうではない。(ルカ13,45a)」

被災した東海岸を海に沿って、かつて人々の日々の暮らしの場が虚空となっている。しかし、真に《虚》、《空》なのだろうか。

ただ私たちに見えないだけ、聞こえないだけなのではないだろうか。そこに充ち、立ち上るものを見、聞きとらなければならないのではないだろうか。

また、かつて関東大震災に関して、ガンディーが記した言葉がある。

「日本で起きた震災は、神の怒りに触れた結果なのだろうか。

なかには天災は罪深い人間への天罰だ、と説く人がいるが、それは違う。

自然はときに残虐な暴力となって、人々に降りかかる。

けれどもあらゆる出来事には意味があると考えたら、

わたしたちは自然の猛威さえからも、眼をそらさずに何かを学び、

救いの道を探るべきではないだろうか(註3)」。

「亡くなった人の思い出を不滅のものにするために、

わたしたちはいま何をすべきだろう。

涙を流すのはたやすい。

しかし、それだけでは彼の身近な人々にも、彼を深く愛する人々にも、

わたしたちにも、なんの慰めにもならない。

わたしたちがなすべきことは、亡き人がそのために生き、全力を傾けた仕事を

受け継ぎ達成することだ。肉体は滅びても、魂は決して滅びない。

亡くなった人の魂は、そうして不滅のものになる(註4)」。

生き残った私たちはなにをなすべきであろうか。

一、現し世の縁と絆・・・・・・・・方丈記の世界

三陸地方は、わたしたちの生きているこの時からさほど遠くない時にも幾度か津波災害に見舞われている。1896年7月(明治二十九年)の津波、昭和八年の津波。そして1960年(昭和35年)のチリ地震による津波被害を記憶している人も多いと思われる。

さらに遡れば、記録に残っているだけでも、死者千余名に及ぶ869年(貞観十一年)の津波被害をはじめ、数知れないほど頻発している(註5)。昭和八年の津波に直面した小学校の子どもたちの作文が残っている。

「すっかり明るくなったので、下に行って家の人はどこかにいると思ってあちこち見まわしたが、誰も私の家の人がいると教えてくれないし見当たりませんでしたその時、私ははじめて一人残ったということがわかりました。

わたしは泣きながらお墓のところまで来ました。そこで火にあたっている人を見たら、その人は頭から津波の水をかぶってブルブルふるえていました。

叔父さんと山こに来た時、小林の人達が、けがをしたりお父さんやお母さんを亡くしたと

いって泣いている姿を見て、わたしも黙って居られなくなって一緒に泣きました。其の晩は、いくら寝ようとしても死んだ家の人達を思い出して一寸も眠られませんでした。

翌日叔父さんたちは、死体をさがしてくるといって出はって行きました。

表に出て下の方を見下ろしますと、あっちこっちにごろごろと沢山の死体がありました。布団を着たまま死んでいる人もあれば、裸になって死んでいる人もありました。（註6）」

また、すこし年嵩の高校生が記した作文がある。

「あっちからもこっちからも泣き叫ぶ声、また誰かを呼ぶ声、遠くの方からは家の壊れるようなわりわりという音が物凄く聞こえて来ました。山へ上って墓の前まで行ったら、人々が沢山居りました。

わたしが一番高い所に行くと、多くの人達がたき火をしてあたって居りました。そして、あちこちを見たら八重子と梅子姉さんが皆と一緒に居りました。思わず、『ねえさん』と言ったら、私の方を向いて眼には涙を一杯ためながら、「誰だと思ったらお前か、よく助かった。お母さん達はどうなったろうなあ」と一人言の様に言ったまますすり泣きをしました。私の眼にも知らず知らず涙がぼろぼろとこぼれて参りました。

山から下の方を見ると一面に火が燃えて、その火の中から片方の手を挙げて、『助けるー、助けるー』と叫んで居るのが見えました（註7）」。

火の海から手を突き出し必死の形相で叫ぶ人間の姿をいかなる想いで見たのか。そして、このことを抱え、忘れることもできず、どのように生きていったのか。

同様なことを経験しそれを記したものがある。

「しかし、一種の真空状態がそこにあった。とはいうものの、見上げて、明らかに本郷よりは東、本所深川のあたりが中心とみられる巨大な火焰地帯を望見しては、やはり、当然にその火にまき込まれている人々のことを思わぬわけにはいかないのだ。一人の親しい女が、深川に住んでいた。そういうときに、真赤な夜空に、閃くようにして私の脳裡に浮んで来たひとつのことばが、

『火の光に映じて、あまねく紅なる中に、風に堪えず、吹き切られる焰、飛(ぶ)が如くして一二町を越えつつ移りゆく。その中の人、現し心あらむや』

というものであった。

その中の人、現し心あらむや、生きた心地がすまい、などと言ってみたところでどうにもなるものではない。深川のあの女は、髪振りみだして四方八方の火のなかを逃げまわり

『或は煙に咽びて倒れ伏し、或は焰にまぐれてたちまちに死ぬ。』

ということになっているに決まっているのであろうけれども、本所深川方面であるにきまっている大火焰のなかに女の顔を思い浮かべてみて、私は人間存在というものの根源的な無責任さを自分自身に痛切に感じ、それはもう身動きもならぬほどに、人間は他の人間、それがいかに愛している存在であろうとも、他の人間の不幸についてなんの責任もとれぬ存在物であると痛感

したことであった。それが火に焼かれて黒焦げになり、半ば炭化して死ぬとしても、死ぬのは、その他者であって自分ではないという事実は、いかにしても動かないのである。ということになれば、そうして深く黙したまま果てることが出来ないで、人として何かを言うとしたら、やはり、その中の人、現し心あらむや、とでも言うよりほかに言いようというものもないものであるかもしれない……。」(註8)

ただ黙して頭を垂れるしかないのかもしれない。ひとは他者の死を死ぬことはできない。人の親さえ子の生を生きることはできず、子は親の死を死ぬことはできないのである。生きるのも死ぬのも独り、独りで生まれてきて、独りで死んでいくしかない存在である。

ここまで私たちの時代からさほど遠くない時代の出来事を見てきたが、もう少し、視野を広げていくと、先に記した堀田善衛氏も採りあげている鴨長明に眼が止まる。鴨長明は、京中に殺傷事件が頻発したといわれる頃に生まれ、安元の大火、辻風、二年にわたる養和寿永の旱魃・飢渴、大地震を経験し、その記録を残している。その災害の記録のさなか、辻風と大地震の間に「都遷り」を挿入しているのはいかなる意図があったのか。いづれにしてもその被災の記録は実地検証に基づいている。

鴨長明は、一連の出来事から三十年余経過して、往時を振り返って記している。同じく堀田善衛氏も同じく戦災から二十五年して鴨長明を土台に「私記」を記している。「二十五年後の今日、またこの二十五年間の私自身の思想的営為の恐らくはすべてがその干渉してくるであろうから。」(註9) 両者ともその《出来事》に対面するためには相当数の年月を必要としたことを物語る。

方丈記では、具体的な記述に入る前に、

「朝ニ死ニタニ生ル、ナラヒ、タゞ水ノ泡ニゾ似リケル。不知、生マレ死ル人、イヅカタヨリ来リテ、イヅカタヘカ去ル。仮ノヤドリ、誰ガ為ニカ心ヲナヤマシ、何ニヨリテカ目ヲ悦バシムル。ソノ主ト栖ト無常ヲアラソウサマ、イワバ朝顔ノ露ニコトナラズ。」(註10)

冒頭から、あらゆるものは変化する。万物流転の感慨に溢れる。

その具体的例証として、先ず

「安元三年四月廿八日」「風ハゲシク吹キテシズカナラサリシ夜、戌ノ時許(バカリ)、都ノ東南ヨリ出テ来テ西北ニイタル。」「火本ハ樋口富ノ小路トカヤ。舞人ヲヤドセル仮屋ヨリ出デ来リケルトナン。」「空ニハ灰ヲ吹キタテタレバ、火ノヒカリニ映ジテアマネク紅ナル中ニ、風ニ堪エズ吹キ切ラレタル焰、飛ガ如クシテ一ニ町ヲコエツ、移リユク。其中ノ人、ウツシ心アラムヤ。或ハ煙ニムセビテ倒レ臥シ、或ハ焰ニ眩レテタチマチニ死ス。或ハ身ヒトツ辛ウシテ遁ル、モ、資財ヲ取出ルニ及バズ。七珍万宝サナガラ灰燼トナリニキ。」(註11)

その書き様は、その場に立ったものでしかかけないようにきわめて具体的で、精緻である。人の生死、そして「七珍萬寶」さながら「灰燼」、形あるものはすべて壊れ、消失するという認識を示す。

次に「辻風」について記す。

「治承四年卯月ノコロ、中御門京極ノホドヨリ、大キナル辻風発リテ、六条ワタリマデ吹ケル事ハベリキ。三四町ヲ吹キマクルアヒダニ籠レル家ドモ、大キナルモ、小サキモ、ヒトツトシテ破レザルハナシ。サナガラ平ニ倒レタルモアリ。桁・柱バカリ残テルモアリ。」「イハ無や、家ノウチノ資財、数ヲ尽クシテ空ニアリ」「彼ノ地獄ノ業ノ風ナリトモ、カバカリニコソハトゾ覺ユル。」「辻風ハツネニ吹ク物ナレドモカ、ル事ヤアル、タゞ事ニアラズ、サルベキ物カナドゾ、ウタガヒハベリシ。」(註12)

やはり、偶然の出来事とは思えず、経典が伝える「地獄の業風」以上の「辻風」になにかの〈しるし〉を汲み取ろうと思いをさせる。

つづけて挙げているのが「都遷り」。そこでは「古京ハスデニ荒テ、新都ハイマダ成ラズ」、庶民にとって遷都も災害の一つに数えられるものなのか。

そして、飢渴が打ちつづく。

「養和ノコロトカ、久クナリテ覚ヘズ。二年ガアヒダ世中飢渴シテ、アサマシキ事侍リキ。或ハ春・夏ヒデリ、或ハ秋大風・洪水ナド、ヨカラヌ事ドモウチ続キテ、五穀事々ク生ラズ。夏植フルイトナミアリテ、秋刈り冬取ムルソメキハナシ。是ニヨリテ国ノ民、或ハ家ヲ忘レテ山ニ住ム」。「果テニハ、笠ウチ着足ヒキ裏ミ、ヨロシキ姿シタル物、ヒタスラニ家ゴトニ乞ヒ歩ク。カク侘ビシレタルモノドモノ、歩クカト見レバ、スナワチ倒レ臥シヌ。築地ノツラ、道ノホトリニ、餓ヘ死ヌル物ノタグヒ、数モ不知。取り捨ツルワザモ知ラネバ、クサキ香世界ニ充チ満テ、変リユク貌・アリサマ、目モ当テラレヌコト多カリ。イハムヤ河原ナドニハ、馬・車ノ行キカフ道ダニナシ。アヤシキ賤・山賤モ力尽キテ、薪サヘ乏シクナリユケバ、頼ムカタナキ人ハミヅカラガ家ヲ壊チテ、市ニ出デテ売ル。一人ガ持チテ出デタル価、一日ガ命ニダニ不及トゾ。アヤシキ事ハ、薪ノ中ニ、アカキ丹ツキ、薄ナド所所ニ見ユル木、アヒ雑ハリケルヲ、尋ヌレバ、スベキカタナキ物、古寺にイタリテ仏ヲヌスミ、堂ノ物具ヲ破リ取りテ、破リ碎ケルナリケリ。濁悪世ニシモ生マレアヒテ、カヽル心ウキ事ヲナン見侍シ。」（註13）

「日ヲ経ツ、窮マリユクサマ、少水ノ魚ノタトヘニ適ヘリ」という状況で、「路上で餓死」が頻発している実状を、自ら足を運んで実見にした記述を連ねる。路上では「一人ガ持チテ出デタル価、一日ガ命ニダニ不及トゾ」という具合で、「目モ当テラレヌコト」が現出する心憂き末世の濁悪世に生れついたことの認識で、仏教に携わる者の心情が零れる。

その記述のあと眼にした人々の生死のうちに垣間見たある種の真実を刻む。

「イト哀レナル事モ侍キ。去リガタキ妻・夫持チタル物ハ、ソノ思ヒマサリ深キ物、必先立チテ死ヌ。ソノ故ハ、ワガ身ハ次ニシテ人ヲ勞ハシク思フアイダニ、マレマレ得たる食物ヲ彼ニ譲ルニヨリテナリ。サレバ、親子アル物ハ、定マレル事ニテ、親ゾ先立チケル。又、母ノ命尽キタルヲ不知シテ、イトケナキ子ノ、ナヲ乳ヲ吸イツ、臥セルナドモアリケリ。」（註14）

末世とはいえ、そこに生きる人の時代を超えた普遍的な情愛の極みの姿が伝えられる。自分より大切な人がある人、自分より相手を大切に人、相手が望む事を自分がしたいことより優先する人。其の人々の生きる姿は私たちの心を打つが、現実の生身には悲惨な姿で押しかかってくる。

「母ノ命尽キタルヲ不知シテ、イトケナキ子ノ、ナヲ乳ヲ吸イツ、臥セル」子は、どうなったであろうか。生き延びることがあってら、このような事態を自分の心にかに整えおさめていくのだろうか。

また、その個所のあと同じくある仏教者の姿を描く。

「仁和寺ニ隆暁法印トイフ人、カクシツ、数モ不知死ル事ヲ悲シミテ、ソノ首ノ見ユルゴトニ、額ニ阿字ヲ書キテ、縁ヲ結バシムル事ヲナンセラレケル。」

「人数ヲ知ラムトテ、四五両月ヲ計ヘタリケレバ、京ノウチ、一条ヨリハ南、九条ヨリ北、京極ヨリハ西、朱雀ヨリハ東ノ、路ノホトリナル頭、スベテ四万二千三百余ナンアリケル。イハムヤ、ソノ前後ニ死ヌル物多ク、又、河原・白河・西ノ京、モロモロノ辺地ナドヲ加ヘテ言ハ

「實際限モアルベカラズ。イカニイハヌヤ七道諸国ヲヤ。」(註15)

なぜ、鴨長明はこの法師の行為を記したのか。死者の実数を挙げるためだけではないであろう。隆暁法印は、「四万二千三百余」の死者の「額二阿字ヲ書キテ」、なにを想ったのか。おそらく鴨長明が見たものと通じることを感じたからこそ此処にことさらに記したのであろう。

この後には、大地震の記述が連なる。「ヲビタゞシク大地震振ルコト侍キ。ソノサマ世ノ常ナラズ」で、山は崩れ、河は埋められ海は傾いて陸地を水浸しにする。地割れを起こし、今でいう液状化現象か「水涌キ出テ」、巖が割れて谷に転がり落ちる。そして余震がつづく。

「世ノ常驚クホドノ地震、二三十度振ラヌ日ハナシ。十日廿日過ギニシカバ、ヤウヤウ間遠ニナリテ、或ハシ四五度、二三度、若ハ一日マゼ、二三日二一度ナド、ヲホカタソノ余波三月バカリヤ侍リケム。」(註16)

その結果、人々の「人皆アヂキナキ事ヲ述ベテ、イサ、カ心ノ濁リモ薄ラグト見エシカド」年月が経つと、まるで忘れたかのように口の端にあげる人もいなくなってしまったという。

以上の災害は鴨長明の若き日に立て続けに起きた出来事である。記述されていないが、他に長雨や流行病が起きている。

彼が生きた時代は平安末。戦乱、群盗跋扈が頻発。政治的には清盛の遷都、木曾義仲の入京、源頼朝の挙兵。そして、自然災害、社会的現象が不安定な動乱期に生きた人の精神形成にいかにか影響を与え、いかなる思念を持たせるようになったのか。

「ユク河ノナガレハ、絶エズシテ、シカモモトノ水ニアラズ。澱ニ浮カブウタカタハ、カツ消エカツ結ビテ、ヒサシク留マリタルタメシナシ。世中ニアル人ト栖ト、又カクノゴトシ。」(註17)

よく知られた冒頭の一句に結晶した。それは転変無常の世界観に裏打ちされたものである。

具体的に人の生死に関しても、以下のごとくである。始めに述べたことを再度引き写す。

「朝ニ死ニタニ生ル、ナラヒ、二三十人ガ中ニワヅカニ一人・二人ナリ。朝ニ死ニタニ生ル、ナラヒ、タゞ水ノ泡ニゾ似リケル。不知、生マレ死ル人、イヅカタヨリ来リテ、イヅカタヘカ去ル。又、不知、仮ノヤドリ、誰ガ為ニカ心ヲナヤマシ、何ニヨリテカ目ヲ悦バシムル。ソノ主ト栖ト無常ヲアラソフサマ、イハバ朝顔ノ露ニコトナラズ。」(註18)

「方丈記」が完成した同年に法然が没している。親鸞が「教行信証」を筆を執り始めたのはこれから間もないことであり、道元が鎌倉に赴いたのも数十年あとである。

相変わずつづいたのは、洪水、大風雨。大凶作、天然痘の流行等々、そして大勢の餓死者がみられた。

二、空なるかな—コヘレットの言葉

「空なるかな、空なるかな、ああ、すべて空なるかな」で始まるコヘレットの言葉は、「一切は空」という根底的な主題に基づいていくつかの具体的事象について説く。先ず、「一代過ぎればまた一代が起り、永遠に耐えるのは大地 (1,4)」で、「川はみな海に注ぐが海は満ちることなく どの川も、繰り返しその道程を流れる (1,7)」という。「かってあったことは、これからもあり かつて起こったことは、これからも起こる。太陽の下、新しいものは何ひとつない (1,9)」という認識を示す。

「わたしは太陽の下に起こることをすべて見極めたが、見よ、どれもみな空しく、風を追うようなことであった (1,14)。」そして、「知恵も知識も狂気であり愚かであるにすぎない」「風を追うようなこと (1,17)」である。何故なら、「知恵が深まれば悩みも深まり、知識が増せば痛みも増す (1,18)」から。また、「この手の業、労苦の結果のひとつひとつ」は「どれも空しく風を追うようなこと (2,11)」であると。更に言う。「太陽の下に起こることは、何もかもわたしを苦しめる。どれもみな空しく、かぜを追うようなこと (2,17)」である。

「何事にも時があり
 天の下の出来事にはすべて定められた時がある。
 生まれる時、死ぬ時
 植える時、植えたものを抜く時
 殺す時、癒す時
 破壊する時、建てる時
 泣く時、笑う時
 嘆く時、踊る時
 意思を放つ時、石を集める時
 抱擁の時、抱擁を遠ざける時
 求める時、失う時
 保つ時、放つ時
 裂く時、縫う時
 黙する時、語る時
 愛する時、憎む時
 戦いの時、平和の時 (3,1~8)」

この認識のもと、「すべての神の業は永遠に不変であり 付け加えることも除くことも許されない (3,14)」し、「今あることは既にあったこと (3,15)」、「すべての出来事、すべての行為には、定められた時がある (3,17)」と説く。

とりわけ人目を引くのは、次の点である。

「神が人間を試されるのは、人間に、自分も動物にすぎないということを見極めさせるためだ、と。人間に臨むことは動物にも臨み、これも死に、あれも死ぬ。同じ霊を持っているにすぎず、人間は動物に何らまさるところはない。すべては空しくすべてはひとつのところにいく。

すべては塵からなった
 すべては塵に戻る。 (3,18b~20)」

一般的な西欧的な感覚と齟齬を来すものである。即ち、霊的存在は人間のみであり、人間以外の諸動物は非霊的存在であるという認識とは明らかに異なっている。

また、耳目を引く一句も存在する。

「人間が才知を尽くして労苦するのは、仲間に対して競争心を燃やしているからだということも分かった。これもまた空しく、風を追うようなことだ。 (4,4)」

当然と思われる表現も見られる。

「銀を愛する者は銀に飽くことなく
 富を愛する者は収益に満足しない。」

これもまた空しいことだ。(5,9)」

それは、

「人は裸で母の胎を出たように、裸で返る。

来た時の姿で、行くのだ

労苦の結果を何ひとつ持っていくわけではない。(5,14)」

からである。そして、「言葉多ければ空しさも増す」ということも知っていた。

また、人間の知恵の限界も指摘する。

「何事にもふさわしい時があるものだ。

人間には災難のふりかかることが多いが、何事が起こるかを知ることはできない。どのように起こるかも、誰が教えてくれようか。

人は霊を支配できない。

霊を押しとどめることはできない。

死の日を支配することもできない。(8,6~8)」

「太陽の下に起こるすべてのことを悟ることは、人間にはできない。

人間が、どんなに労苦し追及しても、悟ることはできず、

賢者がそれを知ったと言おうとも、彼も悟ってはいない。(8,17)」

知恵も含めて、人間という存在そのものの限界ということもできようが、なによりも人間という存在そのものの根源的な在り方を指摘しているにすぎないということもできる。

以下の箴言も同様である。

「時と災難はすべてのものに臨む

だれも自分の時がいつ来るかを知らない。

魚が不運な網にかかり、小鳥が罠にかかるように

人間もまた、不運な時が突然襲う」(9,11b~12a)」

「未来のことは誰にもわからない。

死後どうなるか、誰が教えてくれよう(10,14)」

「長生きし、喜びに満ちているときにも

暗い日々も多くあろうことを忘れないように。

何が来ようとすべて空しい。(11,8)」

それ故にこそ、人間は

「青春の日々にこそ、お前の創造主に心に留めよ。

苦しみの日々が来ないうちに。

『年を重ねることに喜びはない』と

いう年齢にならないうちに。

太陽が闇に変わらないうちに。(12,1~2)』

このコヘレットの中で説かれているのは、いうまでもなく厭世的な懐疑論ではない。

また、この書に記されている「空」「風」の原語は、神の「息」、「霊」につながる。受動的存在としての生身の人間の身体は、完全に人間の意のままに動かし得るものではないという根本的に認識を述べたものである。単に「空しい」という情緒的、悲観的情念的な感慨ではなく、あらゆるものは人間の知恵と力の及ぶところではないという判断的な認識を記したに過ぎないものである。

コヘレットが記されたのは、紀元前二世紀前後だとすると、当然アショーカ王の仏教ミッションとの関わりも考えられる。一説によると、紀元前三世紀に行われたそのミッションは北アフリカにまで及んだといわれる。「遠く小アジア・ギリシャ・エジプトにも使節を派遣して、法にもとづく政治の理想を伝えさせた。」(註19) 直接的な接点はなくとも、間接的な影響も十分に考えることもできよう。

しかし、洋の東西を問わず、人間の経験界で事物、現象を深く黙思すると《生滅去来》の念を抱くことはありえないことではない。さらに冥想を深めていくと、言葉による存在分節以前の、言語では表出できない《存在そのもの》としか云い様がないものに逢着する。西欧では対象的な思惟であり、自我に基づいて言葉で対象を把握しようとする。西欧的な合理主義思考では、《嘔吐》的な状態に陥るかもしれない。《空》を論理的に説く般若経典が現れるのは、紀元前一世紀といわれる。ナーガールジュナの「中論」を経て唯識へと伝わっていく。それを差別相から人格論的に表出したのが浄土三部経である。アミタ、勢至、観世音と三尊形式で「空」を説く。それは三位一体的な理解とっていいかも知れない。《空》は《有》であって《無》ではない。しかし、《有》でもない、《無》でもない。一切が「空」であると、すべてを徹底的に相対化し絶対への志向を内に秘めたものである。名色を超えた無名無相の絶対的真実在である全一態が、《仏性》という呼び名で具体化したものが個別化され、一人ひとりの人間に胎蔵されているとしたら、すべての各個人は「絶対的全一態」と基底で関連することになる。

おわりに

一人の亡くなった人の周りには大勢のその死を悼み、そして。その死に傷ついている人がいる。ある小学生は、「なんで死ぬのがママだったの」と問いかけている。

ある幼児は、「ママ、どうしていないの?」「うちのママは流されていないんだ」「ママは星になったんだよ。波になって会いたいな」。近頃よく母親の夢を見ると話す。「パパとママがお話しているの。でもママは、手を振って何も言わずに行っちゃった。それで僕、泣いたの。」

この子どもたちはこれからも生きていかなければならない。

「なぜわたしたちでなくあなたが?

あなたは代わってくださったのだ、

代わって人としてあらゆるものを奪われ、

地獄の責苦を悩みぬいて下さったのだ。(註20)』

私たちの居住しているところではなく、東日本の太平洋側で起きた震災は、わたしたちではなくその地域で生活している多くの方々が生命を落とされた。亡くなられた方々に対しては、神谷美恵子氏が語

る「あなたは代わってくださったのだ」という認識は当然と云えるかもしれない。

しかし、その人たちには一人で生きている和ではなく、親兄弟子供がいる。震災によって残された幼い子供たちは、まだまだ親の庇護が欠かせない年頃である。この子たちにとって、「逃れようとて放さぬその鉄の手に 朝も昼も夜もつかまえて 十年、二十年も生きて」(註20) いかなければならないのだ。その「長い戦いの後に」は、「微笑み」が浮かびただよくなることであろう。だが、この子たちが引き受けなければならない辛苦艱難をわたしたちはどう考えればいいのか。

わたしたちにとっても若者にとっても、震災は過去の問題、いまは孤独死。日々飛び出してくる様々な今日の問題に対応しながらも、震災の出来事を終わった出来事としてはならない。いまなお《進行中の出来事》であり、或る意味では、《災害》は深刻化している。わたしの問題として、いまの問題として、そして人間としての全一態の個別体として他の個別体に向かい合って生きなければならない。

註

註1 毎日新聞 2011.6.10

註2 新 日本古典文学大系39 佐竹・久保田校注「方丈記」 p.7

註3 ガンディー 「ギイーターについての論考」 1926.4.17

浅井幹夫監修 「ガンディ 魂の言葉」 内録

註4 ガンディー 「バーブー物語」 浅井幹夫監修 「ガンディ 魂の言葉」 内録

註5 吉村 昭著 「三陸大津波」 p.60 文芸春秋社 2011

註6 吉村 昭著 「三陸大津波」 p.132 文芸春秋社 2011

註7 吉村 昭著 「三陸大津波」 p.138 文芸春秋社 2011

註8 堀田義衛著 「方丈記私記」 p.13~14 新潮社 1981

註9 堀田義衛著 「方丈記私記」 p.32 新潮社 1981

註10 新 日本古典文学大系39 佐竹・久保田校注「方丈記」 p.3~4

同上 p.4~5

同上 p.6~7

同上 p.11~12

註11

註12 尚、コヘレットの日本訳は 聖書 旧約聖書続編付 新共同訳 日本聖書協会 2001 を開いた。一部、個人的に訳した。

註13 聖書 原文校定による口語訳 コヘレット一伝道者の書 p.62~63

フランシスコ会聖書研究所 訳注 サンパウロ 1996

註14 同上 p.12~13

註15 同上 p.13~14

註16 同上 p.15

註17 同上 p.3

註18 同上 p.3~4

註19 インド思想史 第2版 中村元著 p.74 岩波書店 1982

註20 神谷美恵子著 「うつわの歌」 みすず書房 1989